



《論考》シリーズ・地域の歴史遺産を考える（2） ：古代の大阪湾にやって来ていたもの：ウミガメの 上陸・産卵（論考と史料紹介）

坂江, 渉

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 3(平成16年度事業報告書):129-136

(Issue Date)

2005-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002211>



古代の大阪湾にやって来ていたもの -ウミガメの上陸・産卵-

神戸大学文学部地域連携センター主任研究員 坂江 渉

はじめに

地域連携センターの研究員の仕事の一つとして、地域の人々にとって身近な歴史遺産とは何か、またそれをどのように活用できるかなどの点について、古代史の立場から考えている。

昨年度はその一環として、かつて兵庫県内にたくさんあった「松原海岸」や自然の浜辺の「景観」をめぐる問題にスポットをあてた。古代の『風土記』の神話・伝承のほか、さまざま説話を素材にして、それが海辺の住民にとってどのような意味をもったかなどの点を考察した⁽¹⁾。

今年度はそうした研究の延長線上の作業として、県内各地を実際に訪れた。それぞれの土地の歴史資料・文化財・伝承・民話・自然文化遺産等をめぐる情報史料収集や聞き取り調査をおこない始めた。その中で今回初めて知って驚いたことが、播磨の明石の海岸線で、今から20年ほど前から、ウミガメが定期的に産卵しにやって来ている事実である。小稿では、このウミガメの上陸・産卵をめぐる関連情報の収集と、またそれが歴史上、地域の住民の生活文化とどのように関わっていたかについて述べてみたい。

1、明石のウミガメ

明石市役所や日本ウミガメ協議会のホームページなどによると、明石の海岸で産卵が始まったのは1986年。それ以来ほぼ2年おきのペースで、5月～8月頃、アカウミガメの上陸・産卵が続いているという。場所は明石海峡～播磨灘の沿岸で、林崎・松江・藤江・八木・江井島・魚住などの人工養浜の砂浜である⁽²⁾。このうち八木の海岸は、「明石原人」の腰骨発見地としてよく知られたところでもある。ただし残念なことに、2000年を最後にして、産卵そのものは途絶えている。その原因として、この付近の海辺の環境悪化（ジェットスキーの騒音等）や生態系の微妙な変化、あるいは砂浜の劣化（固結化）などが考えられている⁽³⁾。地元の人々の懸念も徐々に広がりつつあるようである。

しかし古くからの住民の証言によると、戦前から戦後の昭和25年頃にかけて、この付近一帯の浜辺には、毎年のように上陸・産卵が確認されていた。あたかも「浦島太郎」の話のように、子供たちはカメと一緒に遊んでいたという（『神戸新聞』明石地方版2003年1月7日付）。また食糧難の時代には、産卵後のタマゴが盗まれることもあった。しかし漁師たちも通常カメを尊び、見つけたら「海神さま」などとして、必ず酒を飲ませて沖に返す風習があったという⁽⁴⁾。これらの話を聞くと、内海部の海浜でありながら、この地域でのウミガメの産卵・ふ化は、古い時代、ごく普通の現象であったようである。

2、神戸地域でのウミガメの記録

この明石でのウミガメの話が気になったので、もう少し東側の海岸線、——大阪湾北岸の西摂・神戸地域の状況はどうなのか調べてみた。現在この地域の臨海部には、1960年代以降の「高度経済開発」により、自然海岸はほとんど残されていない。地元の環境団体の調査によると、尼崎市東端～明石川に至る全長約150kmの海岸線のうち、「自然」の砂浜の景観を残す海岸は、須磨海岸（神戸市）や御前浜（西宮市）など、わずか1.25km（全体の0.8%）にすぎないという⁽⁵⁾。こうした現状のもと、明石と同じような産卵・ふ化を望むのは無理かもしれない。しかしそれ以前の時代にまで遡ってみると、ここにもウミガメは定期的に来ていたようである。

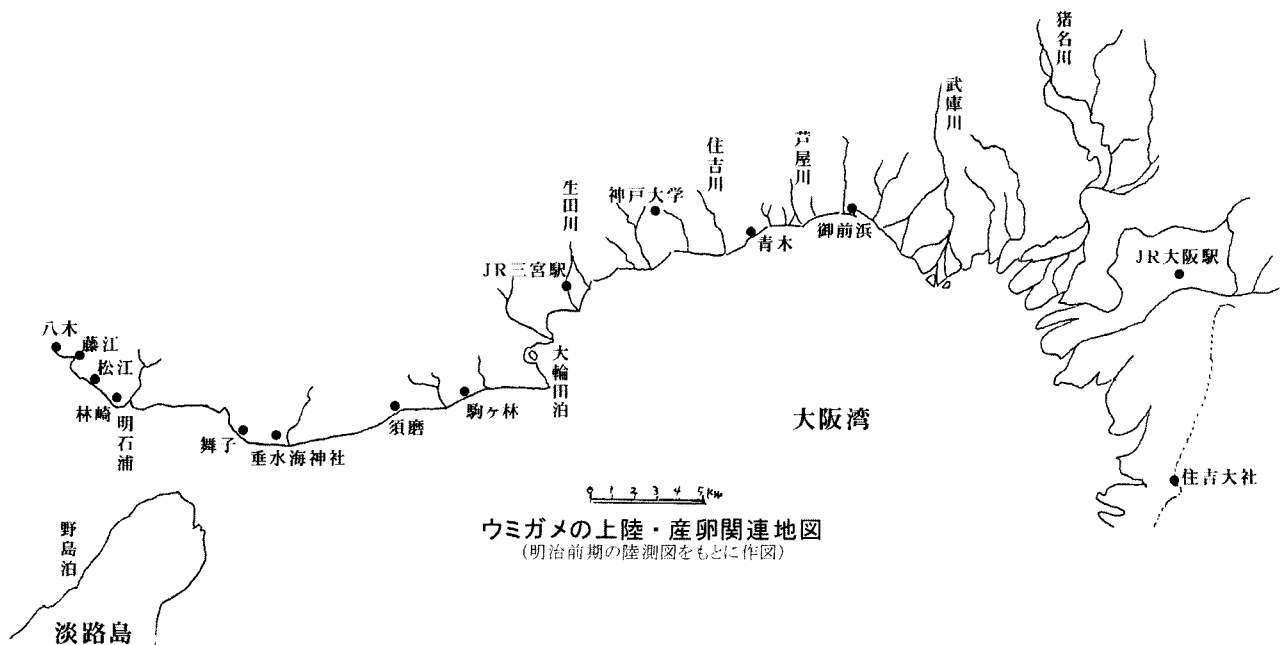
①東灘区青木地区

神戸市東灘区の東よりに青木^{おおぎ}という海辺の町がある。東隣りに接する深江とともに、早くから漁師町や操船者の町として栄えてきたところである。近世初頭の『慶長国絵図』には「青木村」とみえている。この青木地区の旧村（部落）所有の財産を管理する「財産区」が作ったホームページが公開されている。それによるとこの青木の地名は、そもそもウミガメの漂着に由来するらしい。

記紀（古事記・日本書紀）の「神武東征」譚の中に、有名な槇根津日子（椎根津彦）の水先案内の話が登場する。地元ではこの槇根津日子が役目を終え、「青亀」の背に乗ってたどり着いたのが、昔の「青木の浜」だったと伝える。そこでこの付近が「青亀」と呼ばれるようになり、やがて「青木」に変化したのだという。もちろんこれは地名の語音に付会した地元住民の言い伝えの一つであろう。しかしこのような伝承ができるほど、この地とウミガメとの関わりは相当深かったとみるべきであろう。

実際、財産区のホームページの画像をみると、

昭和32年（1957）頃、たまたま青木浜に漂着したアカウミガメの写真が映し出されている。今日この青木周辺の海は、ほとんどコンクリート護岸で埋め尽くされ、このような光景さえみることは不可能である。だが一昔前の当地には、白砂青松の浜辺が続いたことが分かっている⁽⁶⁾。その当時、ウミガメの上陸・産卵があったことはほぼ確実であろう。財産区の人にかがうと、ウミガメは「ごく当たり前のようになって来た」という。漁師たちはこれを縁起の良い動物として尊び、沖合いの漁で網に掛かっても、神酒を与えて放すのが常だったらしい。



②長田区駒ヶ林地区

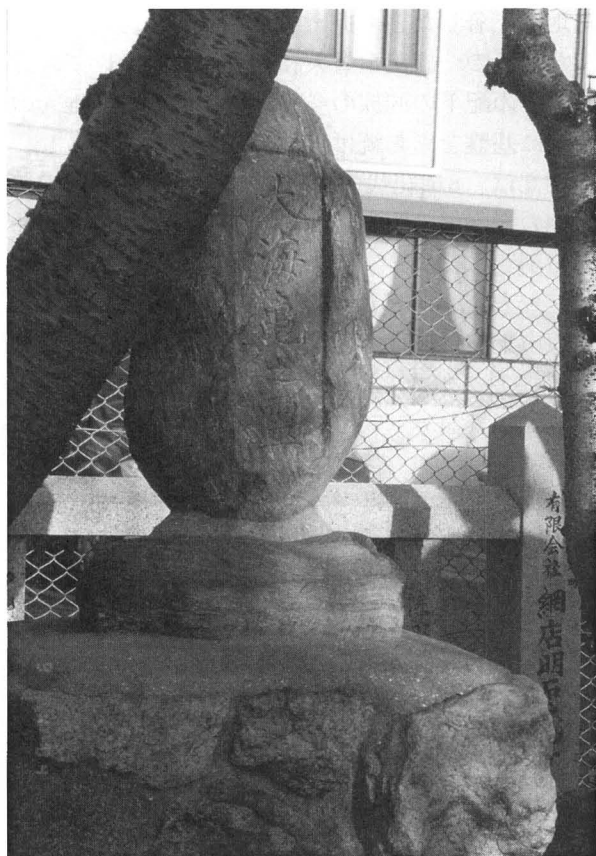
次にこの青木から、もう少し西の海沿いに眼をやると、長田区に駒ヶ林という町がある。ここも中世以来、漁村・ミナトなどとして開けたところで、古く12世紀末頃の藤原忠親の日記、『山槐記』にでてくる「小馬林」が当地をさすなどといわれる（同書、治承3年<1179>6月9日条）。現在も神戸市を代表する漁港やフェリー発着場（長田港）などがあるが、かつてはその名が示す通り、松林の続く美しい砂浜が広がっていたらしい。

当地は10年前の震災で大きな被害を受けたが、その後、2000年の4月以降、史料ネットが地元自治会などの協力のもと、神戸市文書館と共同して、被災歴史資料の現状調査をおこなった⁽⁷⁾。その際、いくつかの古文書や写真などとともに、地

元の歴史研究家の尻池誠一氏が復元した大正時代初期の「駒ヶ林」の地図を確認することができた。そこにはその頃の地区内の家並みが詳細に書かれている。それとともに浜辺付近には、漁船の置き場や左義長祭の行事場などのほか、さらに「海亀産卵地帯」（西之町付近）という記載が書き込まれていた（史料ネット編『尻池家写真帳（駒ヶ林地区）』2000年）。

この記述により少なくとも1910年代の西神戸の海辺に砂浜が残っていたこと、しかもその一角にウミガメの定期的な産卵場所があったことが明らかになった。またこれに加え、駒ヶ林地区の仲之町の浜辺には、地元漁師たちの信仰の中心である戎神社が鎮座している。興味深いのは、その境内の中に、今もウミガメの霊を供養する石碑

(亀塚)が建っている事実である(写真参照)。地元での聞き取りによると、毎年正月の9日～11日の「えびっさん」の祭礼の期間中、ここも漁師たちにより祭られるそうである⁽⁸⁾。これらからして当地区の住民や漁師たちにとり、ウミガメがきわめて身近な存在であり、かつ崇敬すべき生き物であった事実が浮かんできた。



▲長田区駒ヶ林地区の戎神社内の「大海亀之霊」碑

③垂水区の海神社前の浜

その後、この駒ヶ林や明石でのウミガメの産卵の話について、史料ネット代表の奥村弘氏が新聞記事に載せたことがある⁽⁹⁾。その時、思わぬ反響に出くわすことになった。新聞記事を見た垂水区の女性から史料ネット宛に、ウミガメは神戸市東部や明石市だけでなく、一昔前、その中間点の明石海峡に臨む垂水の浜にも来ており、上陸・産卵を繰り返していたとの連絡が入った。その女性によると、ウミガメの姿がしばしば見られたのは、垂水区の有名な古代の式内社「海神社」の前の砂浜であるらしい。そこではカメが上陸すると、海神社の神職が駆けつけて立ち会い、産卵箇所^{うず}に竹竿の「シメ」を張り、お祓いする光景を眼にした

とのことであった。

現在、この海神社の社前は、国道2号線が東西に走り、さらにその前にはたくさんの民家とともに、コンクリート護岸の埋め立て地がつくられている。しかし戦後、昭和30年代前半頃の浜の風景写真などをみると、やはりここも広い砂浜が続いていた⁽¹⁰⁾。これからして当地にもウミガメが上陸していたのはほぼ確実なのであろう。

このようにいくつかの現地調査によると、明石海峡付近一帯だけでなく、大阪湾北岸の都市部の臨海部にも、つい最近まで自然の砂浜が残り、アカウミガメが定期的に上がっていた事実を確認できた。このほかにも昨年、淡路島へ台風による歴史資料の被害状況を調べに行った時、島の西側の五色町の鳥飼浦の浜で、江戸時代におけるウミガメの産卵を示す史跡看板があるのに出くわした。これからして播磨灘における上陸・産卵ポイントは、かなり広範囲におよんでいたといえそうである⁽¹¹⁾。

現在の日本の海岸線でアカウミガメの産卵地として有名なところは、徳島県の日和佐大浜海岸、和歌山県の南部岩代の浜や千里浜、三重県紀宝町の井田海岸、静岡県^{しず}の遠州灘、九州の南西諸島など、いずれも太平洋に面した外洋部の浜である。しかしかつて古い時代の播磨灘～大阪湾一帯の浜には、瀬戸内海の内海部(閉鎖性海域)でもありながら、ウミガメはかなり頻繁に出入りしていたといえるのであろう。

ちなみに日本においてもっとも早く学問的にアカウミガメの産卵地について分析した西村三郎氏の論文(1967年)がある。それによると瀬戸内海では、大分県の別府湾、大阪府の高石、そして兵庫県^ひの須磨～舞子浜の3つの箇所が産卵地として掲げられている⁽¹²⁾。このうち須磨～舞子浜の情報を何によったかは明らかではない。しかしいずれにせよ神戸～東播地域とウミガメとの交わりの深さは確実のようである⁽¹³⁾。

3、槇根津日子伝承とウミガメ

このような明石海峡付近～大阪湾北岸のウミガメ関連の情報を知って、すぐに思い出された古代の史料がある。前述の青木地区^{せい}の地名伝説にも出ていた、記紀の槇根津日子(椎根津彦・珍彦)をめぐる説話である。戦前は地元の愛国・郷土史教育などを通じ、かなり広く知れわたった話の一つ

だと思われる。

『古事記』（神武天皇段）によると、初代の天皇になるイワレヒコとその兄の五瀬命は、日向の高千穂宮を出発し、「宇沙」「竺紫」「阿岐」「吉備」などを経て、大和へ向かった。その途中、ちょうど船が「速吸門」というところにさしかかった。「潮の流れが吸い込むように速い」海の難所、すなわち明石海峡をさすと考えられる。すると突如、「亀の甲に乗って釣りをしつつ、打ち羽を挙り来る人」が現れた。誰かと問うと、「国ツ神」（地元神）であるという。そこで海峡を通る際の船の水先案内を呼びかけると、即座に応じた。彼は「槲機」を出し、イワレヒコらの船をさし入れ、無事水先案内役をつとめた。この功績により「槲根津日子」の名を賜り、やがて「倭国造」（日本書紀では倭直氏）の祖になったと記されている

これまでこの槲根津日子が「亀の甲」に乗って現れたという記述箇所について、それほど深い関心を払ってこなかった（日本書紀では単に「艇に乗りて至る」とある）。しかし明石海峡付近で、近年までウミガメの上陸がみられたという事実を知ることにより、この話はにわかに興味深いものになってきた。一つにこの叙述部分は、この海域でのカメの上陸・産卵が、古代にまで遡る現象だったことを語る、貴重な文献史料として位置づけることが可能だろう。

地理学の地形環境分析の成果によると、古代の大阪湾一帯、そして播磨灘にかけての海岸線は、一部を除き、ほぼ全面的に砂浜が広がっていたと推定されている⁽¹⁴⁾。その当時、そうした浜辺の各所には、おそらく毎年のようにウミガメがやって来て、タマゴを産みつける風景がみられたのではなかろうか。そのような事実の反映が、右の槲根津日子の話であったと理解できよう。

またもう一つ、この槲根津日子の話を見る上でとくに興味深い事実は、明石海峡に臨む式内社の海神社前の浜においても産卵がみられた点である⁽¹⁵⁾。というのも、この槲根津日子を祖に抱くという伝承をもつ倭国造（倭直氏）の一族は、もともとまさにその海神社付近に拠点をおく、——ないしは海神社を自らの守護神の共同の祭祀場として仰ぐ、かなり有力な海人系氏族だったと考えられるからである。

従来の研究では、彼らはこの海域における漁撈

や水産・製塩等の技術のみならず、操船・水運業務にも卓越した能力をもつ海の豪族であった。さらに大阪湾一帯の海人勢力全体を軍事的に統率する地位で、早くから王権に仕えていたと理解されている。ある学説によると、河内平野に基盤をおく大王家が、4世紀後半頃、大和入りをはたす際、その直属の兵力としてはたらき、やがて大和盆地に土着したとも捉えられている⁽¹⁶⁾。

ただその一族が全員大和へ移住したわけではない。その配下の同族の多くは、依然として地元の海域に基盤をもち続けたはずである。

例えば、8世紀代の史料によると、海神社の鎮座地の播磨国の明石郡内に、「海直」や「大和赤石連」を名乗る氏族がいた。また前述の青木地区などを含む摂津国菟原郡内（芦屋市の西部～神戸市東部付近）には、「大和連」氏という氏族が居住していたことが分かっている（『続日本紀』神護景雲3年<769>6月癸卯条）。いずれも槲根津日子を祖に抱く倭国造氏と系譜上の繋がりをもつ海人系集団の一つとみられる⁽¹⁷⁾。そのほかにも明石海峡の対岸の淡路島の野島海人（『万葉集』巻6—932など）、あるいは遠く阿波国名方郡（現在の徳島市付近）にも、その同族集団がいたと考えられる（『日本三代実録』貞観6年<864>4月戊寅条）。

そうした海人系氏族の共通の祖とされる人物が、右の『古事記』の話では、王権の初代の王とされる人物に初めて奉仕・協力した際、あえてウミガメに乗って登場したという。この話からは、この海域に拠点を置く海人勢力が、ウミガメと相当親密な結びつきをもっていた事実を読みとれるであろう。とすれば、そうした結びつきの中身をどうみるかである。

4、ウミガメをめぐる民間習俗

この問題を直接語る古代の史料はもちろん存在しない。しかしこれまでの地元での聞き取り調査や関連史料等にもとづくと、古代のこの地域の海人（海部）や漁師たちは、もともとウミガメとの信仰上の結びつき、——すなわちカメを自らの生活を守り、かつ生業に「幸」（大漁）をもたらす海の神の「化身」や「使者」などとして尊ぶ習俗をもっていたのではなかろうか。

すでに明らかにされているように、本来こういう海辺の人たちに祭られる神は、集落や人の住ま

いの近くに常在するとは考えられていなかった。神は平常、眼前に広がる海の彼方や、沖合の無人島や岩礁などの聖地に鎮座する。生業のリズム（漁業暦）に合わせ、特定の時期、向こうから村を訪れる。そこで村人の祭りや祈りをうけ、その後、ふたたび聖地に戻っていくものと信じられていた。こういう神観念の中から、各地で漂着物（寄り石・寄り木等）への信仰が生まれ、さらに大阪湾でエビス信仰が成立した事実はよく知られたところである。

このような海辺の信仰のあり方を踏まえた上で、日本列島にやって来るウミガメの生態をみると、彼らは日頃太平洋上の各地を周遊している。ところが5月～8月頃になると、各地の砂浜に何度か上がり、産卵をおこなう。しかしタマゴのふ化するまで、決して現地に留まらない。産卵が済むとあっさり海の彼方に消えていく。次の年以降に来るまで、二度と浜辺に姿を見せない。また生まれたばかりの子ガメたちも、すぐに海に向かい、浜辺から去っていく。こういうウミガメたちの生態は、産卵地近くの人々にとって、あたかも神（ないしは神の化身）の「去来」にふさわしい行動として映ったのであろう。とくに上陸・産卵の時期が、場所により、その海域で獲れる特定の魚（りょう）の漁の期間とたまたま一致することがある。そういう場合、あたかもウミガメは大量の魚群を連れてくる「福の神」と見なされることもあったのではないか⁽¹⁸⁾。

このほかウミガメが神聖視される要因として、その容姿がかなり特異である事実も見逃せないだろう。海の生き物でありながら、甲羅と手足（ヒレ）をもつ大形動物がウミガメである。普通の魚などと違い、特別視される傾向はより強かったはずである。またいくつかの民俗事例によると、ウミガメは漁師たちにとって、「益獣」的側面をもっていた。各地の著名な産卵地では、これまで砂浜における実際の産卵ポイントが、台風襲来時の漁船の「船あげ」のランドマークとして利用される所が少なくなかったという⁽¹⁹⁾。

こういういくつかの事実が重なって、ウミガメは古くから「聖獣」や「神の化身」などとして、信仰の対象になるところが多かったのであろう。

古代の史料でも、後世の浦島太郎の話の原型をなす丹波国の「水江浦島子（みずのえのうらのしまこ）」の話が、『日本書紀』雄略天皇22年7月条にみえている。そこでウ

ミガメは、島子を海中の「蓬莱山（とよのくに）」（理想の異郷・他界）に連れていく「靈獣」として描かれている⁽²⁰⁾。また宮廷内の「海幸彦・山幸彦」神話の中で、海神の娘「豊玉姫（とよたまひめ）」が、出産のため「海を照らして」浜辺にやって来る話がある。その時、姫が乗っていたものは、「大亀」だったと伝えている（『日本書紀』神代・10段、一書の第3）。

これらの伝承の背景には、中国の神仙思想や祥瑞（しょうずい）の観念の影響があることも認められよう。それとともにすでにその当時、ウミガメを「聖地」と「人間界」とを結ぶ聖なる生き物と見なす民間習俗があり、それを踏まえた叙述とも理解できる。またこういう記紀史料とは別の、仏教系の古代説話集『日本霊異記』にも、人に助けられたカメが「恩返し」する話などもみえている⁽²¹⁾（上巻一七）。

さらにもっと古い絵画資料に眼をやると、弥生時代の祭器である銅鐸には、当時の生業や農耕生活との関わりで神聖視された生き物がたくさん線描されている。その中にはシカ・イノシシ・サル・サギ・ヤモリ・トンボ・アメンボやスッポンのほか、ウミガメが刻まれている銅鐸も発見されている事実にも注目される（島根県賀茂岩倉遺跡出土銅鐸⁽²²⁾）。

こうしてみると槁根津日子がウミガメの背に乗って現れたという伝承も、もともと古代の明石海峽付近～大阪湾北岸の海人たちの信仰や神祭りのあり方に根ざしていたといえるだろう。定期的に浜辺にやってくるウミガメは、彼らにとって自らの一族を守護し、生業や海の仕事に福をもたらす神霊として捉えられていた。そして上陸・産卵があれば、その都度丁重に祭られていたのではあるまいか。そのようなウミガメへの崇敬心と親しみの深さが、上のような話の創出につながったのであろう。

すでに述べたように、垂水の海神社の前の砂浜でカメが産卵すると、神職が駆けつけ、そこに「シメ」を張り、お祓いをする光景がみられたという。これなどはまさに靈獣としてのウミガメを重んじ、産卵地を「聖域」化し、その神威を祭る儀式の一環をなすと考えられる。史料的な裏付けはないが、相当古くから伝えられた祭儀の一つだったのかもしれない⁽²³⁾。あるいはさらに海神社そのものは、そもそも原初的にはそうしたウミガメを迎えまつる祭祀場として出発したとも推定でき

るのではなからうか。

このほか明石～神戸間のかつての産卵地における聞き取り調査でも、漁師がカメを「海神さま」と呼んだり、御神酒を与えて放っているところが少なくなかった。また長田区の駒ヶ林地区においては、わざわざ神社の境内に、亀塚（カメの供養塔）も建てられていた⁽²⁴⁾。これらはすべて古い時代からカメを重んじるこの地域の人たちの習俗が、何とか今日まで続いている姿とみること可能であろう。

5、ウミガメ信仰の多様性

なお最後に、人々がウミガメを聖獣視するといっても、それを神聖不可侵のものとして崇め、絶対視していたわけではなかった点に留意すべきである。日本列島にやって来るウミガメは、一方から古くから鱉甲細工や古い（亀卜）用のほか⁽²⁵⁾、各地で食用等に供され、さらに害獣視、または畏怖視されるケースも少なくなかった⁽²⁶⁾。これらが例えば、ヒンズー教における牛、イスラム教におけるブタなどの動物崇拝のあり方と大きく異なる点である。

しかしウミガメに対するこうした側面と、上にみた神聖視する側面とは、必ずしも対立しあうものでない。このような二面性は、これまでの列島上の動物信仰の場において、しばしばみられる現象の一つである。

例えば、イノシシやニホンジカなどは、古くから「聖なる生き物」と見なされてきた陸上動物である。ところが彼らの「宍肉」「生血」などが、稲作の農耕儀礼の呪物や神祭りの料物に使われていたことは、古代国家の地誌に史料的痕跡が残されている（『播磨国風土記』讃容郡条冒頭、同郡柏原里荃戸条、賀毛郡雲潤里条など）。おそらく当時の人々はそうした動物を犠牲（生け贄）に捧げ、それを共同で食することなどを通じ、一面でその中に宿る呪力・霊力を得ようとしたのであろう。また他方でそうすることにより、自然環境のバランス（害獣駆除の一種）を図ろうとしていたとも考えられる。現在もみられるウミガメの食習俗も、本来このような意識との関わりに考慮すべきであろう⁽²⁷⁾。

またウミガメの害獣的側面についても、古い時代の信仰の中では、人に害悪を与える動物や「荒ぶる神」が、祭られることを通じて、逆に人の

「守護霊」に転化するという考え方がある点に注意しなければならない。

例えば、現在でもそうであるように、農作物を食い荒らすニホンジカは、農民にとってあくまで害獣にほかならない。しかし一方でシカ、——とくに白いシカは、前述のように各地で神獣として扱われ、人々から祭られるケース多い。これは決して矛盾であるわけではなく、シカを祭ったり、一定の祭儀（忠誠誓約の儀式）をおこなうことにより、それが「害獣」から「農民の守護霊」へ転化するという呪術的思考にもとづいていたとみるべきである。これと同じような構造は、農作の害虫とされる「沢蟹」の場合にもみられ、さらに平安時代の御霊信仰の「疫神」をめぐる観念もそうだったとされている⁽²⁸⁾。

ウミガメの場合、漁業に害悪を加えるから、それを祭るという意識を直接表現する史料や民間行事を、現状では確認できていない。しかし地域によっては、当然そういうところもあったことであろう。ウミガメへの信仰のあり方は、決して一元的ではなかった。人間の実生活や生業への関わり方の違いによって、本来多様なあらわれ方があった点に注意する必要がある。

おわりに

以上、明石海峡付近における近年のアカウミガメの上陸・産卵の事実を出発点にして、西摂・神戸～播磨地域での関連史料の収集と、それに対して地域の人々が、自分たちの生活文化との関わりで、これまでどのような接し方をして来たのか述べてきた。

それによると、まず大阪湾～播磨灘の海岸線には、ここ半世紀頃前まで、自然の砂浜がある程度残り、そこにはウミガメが定期的の上陸・産卵を繰り返していたと推定できた。また槇根津日子がカメの背に乗って現れたという『古事記』の伝承は、これが古代にまで遡る現象だったことを示すと思われる。さらにそうしてやって来たウミガメを、この海域の海人や漁師たちは、基本的に聖獣と見なし、自らの生活や生業に福をもたらす、一族を守護する神霊（神の化身）として迎え祭っていたと考えられる。そしてその名残りは、今日にもみられる点などを明らかにした。

いうまでもなくウミガメが特定の場所に上陸して産卵をおこなうのは、自然現象の一つである。

だがそれを人々がどのように認識し、いかに迎え入れるかは、各時代・各地域における社会文化的な現象として理解することができる。これまで明石海岸をはじめ、各地の産卵地では、将来にわたってウミガメの産卵を持続させていくため、これからどのような浜辺の自然環境をつくったらよいか、どうやってウミガメとの共存を図るのかなどの方策が議論されてきたと思う。

もちろんこれ自体、重要なことである。しかしその一方で、歴史の問題、——すなわちそれぞれの土地の人々が、旧来どのようにカメを受け入れていたか、あるいは生活や信仰との関連で、それをどのように扱ってきたかを探ることも、今後のウミガメ保護をすすめる上で、不可欠な作業になるのではないか。

この点でいうと、例えば垂水の浜で、ウミガメの産卵ポイントに、神職が「シメ」を張り、お祓いをしていたという証言があった。これはいわばウミガメの産卵域を、「聖域」「神域」として表示することにより守っていたことを意味する。この地域でのウミガメの保護のあり方が、人間の信仰、ひいては生活といかに密接に結びついてきたかを語る、貴重な証言の一つと評価することができよう。

筆者はこのように列島上のウミガメの上陸・産卵の現象を、歴史文化的な自然遺産の一つと捉え、今後その具体相や多様性をさらに解明していきたいと考える。関係者の方々のご理解とご協力、および関連史料（情報）のご提供をいただければ幸いである。

註

- (1) 拙稿「地域の歴史遺産を考える（1）—古代史の立場から—」（『平成15年度事業報告書 歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業（2）』神戸大学文学部、2004）。
- (2) 日本ウミガメ協議会の調査によると、林崎で1986年に産卵1、松江で86年に産卵1、89年に産卵1、99年に産卵1、藤江で93年に産卵2、99年に産卵1、八木で87年に産卵1、97年に上陸2・産卵1、江井島で95年に産卵2、魚住で95年に上陸1を確認できるという（亀崎直樹・通事祐子・松沢慶将『日本のアカウミガメの産卵と砂浜環境の現状』（日本ウミガメ協議会、2002）。なお同協議会の会長の亀崎直樹氏、研究員の島達也氏には、この文献の紹介

以外にも、さまざまな関連情報を提供していただいた。ここに改めて感謝申し上げたい。

- (3) 亀崎直樹「ウミガメからみた沿岸域、特に砂浜海岸の現状と未来」（『沿岸域』16—1、2003）。
- (4) 桜井隆之氏や橋保氏など、明石市大久保町八木地区での海岸整備やウミガメ保護に取り組む「八遊会」のメンバーからの聞き取りによる。
- (5) 友野哲彦「自然海岸のもつ公益的機能の経済評価—兵庫県西宮市御前浜を事例に一」（『神戸商科大学商大論集』54—5、2003）参照。
- (6) 国土地理院のホームページには、戦争直後に米軍が撮影した大阪湾一帯の航空写真が公開されている。そのうち神戸市内については、東灘区を中心にみることができる。その時点での青木地区の海岸線に限っていると、現在の新明和工業の敷地から以西の、天井川に至る汀線において砂浜が残っていることを確認できる。
- (7) 橋本唯子「神戸市長田区駒ヶ林地区の再調査について」（『史料ネットNewsletter』22、2000）。
- (8) 聞き取りに際しては、駒ヶ林まちづくり協議会の会長、中本正氏にお世話になった。
- (9) 奥村弘「神戸新聞を読んで コラムが教えてくれたこと」（『神戸新聞』2000年10月15日付）。
- (10) 岡田米夫『播磨国式内社 海神社史』（海神社、1976）など。
- (11) 播磨灘に浮かぶ小豆島の南西部の土庄町戸形崎（香川県）でも、2000年7月に上陸が確認されているという（神戸市立須磨海浜水族館の大鹿達弥氏のご教示による）。
- (12) Saburo Nishimura, The Loggerhead Turtles in Japan and Neighboring Waters, Publications of Seto Marine Biological Laboratory XV (1), Sirahama, 1967.
- (13) なお日本ウミガメ協議会の調べによると、近年の新聞記事から確認できる大阪湾近辺の上陸・産卵地として、大阪府内では貝塚市の二色の浜、田尻町の吉見の浜、泉南市のりんくうタウンの人工海浜の3箇所、徳島県内で徳島市の小松海岸、兵庫県内では前述の明石市のほか、洲本市の大浜海岸・洲本川河口部・厚浜海岸、津名郡一宮町の多賀の浜海岸、そして神戸市須磨区の須磨海岸などが報告されている（亀崎直樹・栃本武良・井口利枝子「大阪湾およびその周辺におけるアカウミガメ産卵の記録」『うみがめニュースレター』42、1999、註2前掲書）。

また淡路島に関していうと、洲本市由良の成ヶ島の東側の浜に、2003年に5回、2004年に2回の上

- 陸が確認できているという（「成ケ島探見の会」の花野晃一氏からの聞き取りによる。なお花野氏にはわざわざ船を出していただき、ウミガメの上陸地点のほか、島内の動植物や史跡についても案内していただいた。ここに記して厚く御礼申し上げます）。
- (14) 日下雅義『古代景観の復原』（中央公論社、1991）、高橋学「地震災害と平野の古環境」（歴史資料保全情報ネットワーク『歴史と文化をいかす街づくりシンポジウム記録集』1995）など。
- (15) 海神社は現在神戸市垂水区に鎮座する。しかし当時は播磨国明石郡に属する神社であった。『延喜式』巻10の神名帳によると、明石郡内には式内社が九座（七社）あり、当社の祭神数は「三座」とみえる。
- (16) 岡田精司「河内大王家の成立」（『古代王権の祭祀と神話』塙書房、1970。初出は1968）。
- (17) 拙稿「古代国家の交通とミナトの神祭り」（『神戸大学史学年報』18、2003）。
- (18) 明石海峡付近の5月、6月頃は、ちょうどタコの成長・漁獲期に相当する。しかし今までの聞き取りによると、このタコとウミガメの上陸・産卵に関わる言い伝え等は確認できていない。
- (19) アカウミガメの産卵地の一つ、静岡県遠州灘の漁師たちは、台風が来そうな時、カメのタマゴの位置を探り、そこよりも上に舟を揚げるのが一般的であったという（『静岡県史』資料編25・民俗三、第2章第1節「動物との交流」）。台風の時、舟をカメの産卵位置より奥へあげ安全をはかる風習は、これ以外のところでも比較的たくさんみられる（野本寛一『生態民俗学序説』白水社、1987）。
- (20) これとほぼ同様の筋立ての話は、『丹後国風土記』の逸文とされる『釈日本紀』巻12にもみえている。
- (21) これと似通った話が、明石藩士の子の橋本海関が書いた郷土誌『明石名勝古事談』（1920～33年刊）に載っている。その中でカメの「恩返し」の舞台が、明石海峡の「垂水海中」となっている点が注目される。
- (22) 国立歴史民俗博物館『歴史フォーラム 銅鐸の絵を読み解く』（小学館、1997）、千田稔・宇野隆夫『亀の古代学』（東方出版、2001）など参照。
- (23) この点について未だ十分な聞き取り調査等ができていない。今後の課題としたい。
- (24) 「亀塚」「亀祠」などは日本列島上の各地に無数みられるが、上陸・産卵現象ばかりでなく、カメの（死体）漂着にもとづいて建てられたものもたくさん存在するらしい（本間義治「クジラとカメの墓を訪ねて」『新潟の生物誌 一海から山まで一』新潟大学放送公開講座実施委員会、1992）。
- (25) 紀伊半島ウミガメ情報交換会・日本ウミガメ協議会『ウミガメは減っているか ～その保護と未来～』（紀伊半島ウミガメ情報交換会、1994）、大江篤「『卜甲』考」（『続日本紀研究』354、2005）など。
- (26) このうちカメの食肉の習俗の痕跡については、すでに古墳時代中頃の大阪湾内の貝塚の遺跡から、水産食料遺物としてウミガメの遺体の一部が発掘されている事例がある（久保和士「考古資料からみた水産食料と漁業」『大阪府漁業史』大阪府漁業史編さん協議会、1997）。
- 文献史料でも、平安時代前期と後期の仏教説話集の、『日本霊異記』（上巻一）や『今昔物語集』（巻3—13、巻17—26、巻19—29、30など）には、ウミガメの交易・売買や、それを食する風を語る説話をみることができる。
- また現在でも紀伊半島や四国南部の海沿いの地域などでは、一定の公的規制のもと、ウミガメの食肉の風があり、それは記録上少なくとも江戸時代まで遡りうる可能性が高いと指摘されている（藤井弘章「紀伊半島南部におけるウミガメ漁とその食習俗」『日本民俗学』215、1998、同「地域差と時代差からみたウミガメの民俗 一海村・離島追跡調査から一」『成城大学民俗学研究所紀要』25、2001など）。
- さらにウミガメが漁網等の漁具を傷めることが多いところでは、それを害獣視し、「縁起の悪い生き物」と見なしているところもある。現在の明石海峡付近の漁師の間でも、一部にはそういう見方が存在している事実を聞いた（大久保町八木地区の「八遊会」の拡大実行委員会での聞き取りによる）。
- (27) 例えば、ウミガメの肉やタマゴを食べると「精力」を得られるという俗信は、そうした呪力性の獲得の問題と関連するだろう。
- (28) 土橋寛『古代歌謡の世界』第3章（塙書房、1970）、土橋寛・池田弥三郎『鑑賞日本古典文学』第4巻歌謡1（角川書店、1975）、岡田精司「古代伝承の鹿 一大王祭祀復元の試み一」（同『古代祭祀の史的研究』塙書房、1992）など。